「再びベテルへ」（創世記三四・一～三五・七）

1　シケムでの出来事

エサウとヤコブ、この双子の兄弟の物語は、前回の創世記三三章で、二人の再会の記事をもって終わっています。

その補い、それが、今日の箇所を含めての数章です。そして三七章から新しくヨセフを巡る物語が始まります。

補いと言いましたが、補いにしてはしかし、余りにもひどい内容が今日の箇所には含まれています。簡単に言えば、一つのレイプ事件（女性に対する性的な暴行）とそれに対する血の復讐事件です。

これだけでは、私もちょっと話しようがありませんので、三五章七節までを、今日の聖書として、大きな流れの中で、三四章に記されている事件を受けとめたいと思います。

はじめに事件の概要を辿っておきます。その際三つの問いを念頭において整理したいと思います。予め申し上げておきますと、まずレイプ事件に関して、不問に付していいのかという問いです。二つ目は、ヤコブの息子らによる復讐事件、皆殺しにした事件ですが、それはレイプ事件の対応として正当なものなのかという問いです。そして三つ目は、ヤコブ自身のこれらに対する姿勢、言葉、これはどう考えればいいのだろう、という問題です。

さて事件が起きたのはシケムという町です。今日の箇所で事件を起こした若者の名前も同じくシケムです。

前の章、三三章の終わりに書いてありましたが、メソポタミヤから帰還したヤコブ、エサウとの再会を果たし、一族はしばらくスコトに滞在します。やがて一行はヨルダン川を渡り、カナンの地に入り、住んだのがシケムです。〈住んだ〉といっても、シケムの町の中ではありません。町の外です。「天幕を張った」（三三・一九）とある通りです。半農半牧の寄留者であることは変わりません。

〈町〉と〈町の外〉、生活の場所もスタイルも違うので、出会うことはあまりないのでしょうけれど、事件はディアが「土地の娘たちに会いに出かけた」（一節）ことから起こります。

この「土地の娘たち」という言葉、エサウの二人の妻についても使われていた言葉です（二七・四六）。イサクとリベカが嫌っていたというカナンの娘たちのことです。ディアが彼女らに会いに行ったことが悪いとは書いてありませんが、聖書が彼女の行動を批判的に見ているのは確かです。

町に来たディアを「捕らえ・・・辱めた」のはシケム、「その土地の首長」ハモルの息子の一人でした。

辱めたのは事実ですが、その後シケムは、彼女を本気で愛しはじめたと書いてあります。「愛し、言い寄った」（三節）は新しい訳（聖書協会共同訳）では「愛し、優しく

語りかけるようになった」です。そして父親ハモルにディアとの結婚を進めてほしい旨、願うのです。

父親ハモルはディアの父ヤコブに会いに来ます。ヤコブは、娘のディアが汚されたことを聞いていたけれども、息子たちには、帰って来るまで黙っていました。仕事（牧畜）から帰ってきてはじめて事実を知った息子たち、兄たちは嘆き、激怒します。父ヤコブを押しのけ、ハモルと話をするのは彼らです。その対話は八節から、かなり長い部分を占めています（一九節まで）。ここに来たのは、父親ハモルと事件を起こした本人、息子シケムです。二人が言ったのは立場の違いからそれぞれ違います。ハモルは姻戚関係を結ぼうと言っています。土地も十分ある、自由に使って、財をなすように、と。シケムは、どんなに高い結納金でも贈り物でも、お望み通り差し上げようと言うのです。しかし共通しているのは、ディアを辱めたということに何も触れていないことです。はっきり言って、これでは、相手の心を少しも動かないだろうと私どもでも思うような話です。ここで第一の問いです。レイプ事件の責任を不問に付していいのかという問いです。おそらくそれは、聖書の問い、神の問いでもあったのではないでしょうか。

2　息子たちの蛮行

ヤコブの息子たちは、そこを問題にしています。

シケムが妹のディナを汚したので、ヤコブの息子たちは、シケムとその父ハモルをだましてこう答えた・・・（一三節）。

本来なら、直ちに、復讐に向かうところかも知れませんが、そこにはやはり力関係があったのでしょうか。そうできない悔しさのようなものも感じます。それでも「だます」のはよくない。その通りです。しかしそんなこと問題にもならないほどのことがなされたのです。

仕事（牧畜）から帰ってきて兄弟たちがこの事件を聞いたときの最初の反応が、七節に出ていました。

イスラエルに対して恥ずべきことを行った・・・。それはしてはならないことであった（七節）。

ここに「してはならないこと」という言葉があります。律法とか掟とかが書かれた形でできたのは、もちろんずっと後の時代、モーセの時代です。しかし族長の時代でも、「してはならないこと」、「恥ずべきこと」ははっきりしていました（レビ記一八章など参照）。

こうした高い倫理意識、これは、じっさい、カナンの人たち、ハモルにしてもシケムにしても、彼らに見られるものと、かなり違っていたということはできるように思いま

す。

しかし問題はその先です。レイプの責任は不問に付されてはならない。それはそのとおりでしょう。しかし、だからといって、ヤコブの息子たちがした血の復讐、皆殺し、略奪は許されるのか、ということです。

父親ハモルがやって来て、ヤコブの息子たち、ディナの兄たちと、いわば交渉し始めたとき、ヤコブの子らには、話し合いで解決しようなどという気持ちはさらさらありませんでした。

皆の思いは、はじめから血の復讐に向かっています。そのためには、父祖アブラハム以来、大切にしてきた割礼すら、〈だまし〉のために使われます。後でそのことははっきりしますが、割礼で苦しんでいるところを襲うためでした。そのため城壁も「難なく」（二五節）突破していきます。

「割礼」の習慣は、ご承知のようにアブラハムによって導入されたものです。それは、あくまでイスラエルの人々が神の契約の民であることのしるしとしてなされたのです。それが、相手をだまし、殺すための手段として使われます。許されることではありません。

襲撃のことは、二五節以下です。はじめは「ヤコブの二人の息子、つまりディナの兄のシメオンとレビ」です。ハモルとシケムを含む、男たちをことごとく殺した、とあります。

次いで、その他の息子たちが、倒れている者に襲いかかり、町中を略奪し、すべてを奪い取って、女、子供をすべて捕虜にした、とあります。シメオンとレビがハモルとシケムを殺害するところまでなら、行き過ぎとはいえ、多少とも説明がつくかも知れません。しかし、他の息子たちがしたことは、たんなる侵略以外の何ものでもありません。

はじめに上げた私の三つの問い、その二番目の問い、ヤコブの息子たちが、ディナのゆえにしたことは、正当なことかという問わざるをえず、今日の私どもから見て是認できないことは明らかです。

3　ヤコブの態度

三つ目の問いです。ヤコブは何をしていたのかという問題です。というのも、ほとんど表に出てこないからです。いくつかの場面が注目されます。

最初は五節です。ヤコブは娘のディナが汚されたことを聞いて、息子たちが帰ってくるまで黙っていた、とあります。

ヤコブが一番傷つき、苦しんでいることを、これは示しています。母親のレアは出てきません。だれも慰めてくれるような人はいません。彼は、子供たちが帰るまで苦しみに耐えたのです。

子供たちが帰るまで復讐を引き延ばしたというような意味ではなく、大きな苦しみに打ちひしがれ、言葉を発することができなかったという意味だと、カルヴァンは説明しています。

もう一つは、一一節です。先に申しましたように、ハモルがヤコブのところに来て話をしようとしたとき、実際に対応したのは、息子たちでした。ヤコブは追いやられたように見えます。しかしいなかったわけではありません。シケムが、一緒に来て、お望みのものは何でも差し上げますと言ったとき、「父や兄弟たちに言った」とあります。ヤコブも聞いていたのです。しかし兄弟たちの憤りは激しく、ヤコブは何か言うことはできません。しかし彼は、その条件で折り合ってもいいと考えているふしがあります。

三つ目は、三〇節です。

「困ったことをしてくれたものだ。わたしはこの土地に住むカナン人やペリジ人の憎まれ者になり、のけ者になってしまった。こちらは少人数なのだから、彼らが集まって攻撃してきたら、わたしも家族も滅ぼされてしまうではないか」とヤコブがシメオンとレビに言うと、二人はこう言い返した。「わたしたちの妹が娼婦のように扱われてもかまわないのですか」（三〇～三一節）。

「困ったことをしてくれたものだ」。ヤコブは息子たちを叱責します。二人は言い返します。「わたしたちの妹が娼婦のように扱われてもかまわないのですか」。もちろん、いいはずはありません。

しかし、怒りに任せて、我を忘れて、皆殺しにする、更には略奪をほしいままにするということは、決して許されてはならないのです。このヤコブの言葉こそ息子たちの行動に対する聖書の評価であり、立場です。「剣をとって」（二五節）多くの民を滅ぼす道を、やがてイスラエル諸部族は進んでいきます（申命記七章）。しかしヤコブの道こそが、共に生きる道こそが、平和のを希求する道こそが神の道だと聖書は語っているのです。このヤコブの先に、私ども「平和の君」（イザヤ九・五）の現れを見ることも許されると信じます。

さてなぜ三四章のような章が、エサウ・ヤコブ物語の補いに付け加えられたのでしょうか。

二つあるように思います。一つは、私どもの住んでいる世界の現実は、まさにこのようものだということです。思いがけない事件、怒り、復讐、侵略、戦争、おぞましい人間の罪と悪の世界です。

もう一つ、ここにヤコブがいるように、そうした中で、苦しみ、悩み、じっとこらえて、共に生きようとした人がいます。神の人です。まさにヤコブは、人間の現実の如何ともしがたい中で、神と共に生きようとした人なのです。そうした中で神はなおも声をかけてくださいます。「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてその地に、あなたが兄エサウを避けて逃げて行ったとき、あなたに現れた神のために祭壇を造りなさい」（三五・一）。ヤコブはいま、剣をとって、自分の正しさのみを主張し、生きようとしている子供たちを危うい思いで見ています。しかしこの時も彼と共に神はいます。この神と共に、これからも歩んでいくようにと、ヤコブは、ベテルへと呼び戻されるのです。

（二〇二二年一一月一三日）